

【研究論文】

採用試験などの進路に関する取組（チャレンジセミナー）の実態調査について ～平成28年度 初等教育学科を中心に～

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 教授 佐伯 育郎 准教授 上村 加奈 教授 川西 正行

はじめに

これまで、教職センター年報において公立小・中学校教員採用試験などに向けたセミナーの実践報告をしてきたが、その効果などについての詳細な分析・考察までには至っていなかった¹⁾。幼稚園教諭・保育士採用試験については、今回がはじめての報告となる。現在ではセミナーは学科を超えたものとなり、教職センターが所掌することになっているが、取組の原点であり今もなお中心をなしているのは初等教育学科である²⁾。この活動の意義を問い直す上でも、初等教育学科の人材育成目標（教育に関する専門的な知識や技能を修得し、主体性と協同性を持った逞しい実践力のある人材を育成する）に照らし合わせて考察を行うことによって、セミナーのあり方を省察する契機になるとともに、今後の方向性を探る材料にもなると考えられる。

そこで本研究は、平成28年度の教員・保育士採用試験対策チャレンジセミナー（以下、セミナー）の成果と課題を見出すことを目的とする。研究の方法としては、平成28年度の初等教育学科4年生（33期生）を対象としたアンケートを実施し、結果について分析・考察していくこととする。

I 平成28年度セミナーの実績

セミナーは正規の授業ではなく、課外で行われる自由参加型の取組である。学生の要望に応える形で本学教員によって開催されることを前提としており、学生の主体的な学びを支援するものである。平成28年度におけるセミナーにおける実績（参加人数の判明分）をまとめると、表1になる。表中の参加人数には他学科の学生も含まれている。初等教育学科4年生のセミナー委員からの情報、及び初等教育学科教員からの報告であるが、出席の記録が残っていない回や出席状況についての報告がなかったセミナーもあるため、必ずしも正確なものとは言えないが、概ね以下の結果となっている。

表1【平成28年度・春期セミナーの実績】

内容	担当	参加人数	内容	担当	参加人数
国語（板書）	岡	31	特別活動	今崎	45
国語	橋村・岡	44	総則	今崎	47
算数	今崎	45	教育法規	杉山	43
社会	村上	35	教育原理	徳本	6
理科	高橋	45	教育心理学	牧	20
体育	川西	43	特別支援教育	木村・李木	46
音楽	大野内・善本	40	集団討論	徳本・佐伯	23
図画工作（実技）	佐伯	46	グループワーク	森	50
図画工作（理論）	佐伯	48	自己PR・願書の書き方	村上	55
道德	村上	41	答申・通知等	今崎	52
総合	高橋	41	論述形式問題書き方	森下	29

表2【平成28年度・前期セミナーの実績】

内容	担当	参加人数
図工（10回実施）	佐伯	15（平均）
集団討論（13回実施）	佐伯	6（平均）

表3【平成28年度・夏期セミナーの実績】

内容	担当	参加人数
音楽（10回実施）	大野内・善本	11（平均）

表4【平成28年度・後期（幼教）セミナーの実績】

内容	担当	人数	内容	担当	人数
面接	今崎	37	数的推理・判断	今崎	7（平均）
小論文	橋村	35	社会	村上	7（平均）
履歴書・自己PR	黒木	37	教育法規	杉山	7（平均）
文章理解	橋村	10	絵本	上村	7（平均）
音楽	大野内・善本	27	保育指針	上村・自主勉強会	7（平均）
理科	高橋	7（平均）	模擬保育	上村	7（平均）
集団討論	佐伯・上村・杉山	8（平均）	過去問・模試	自主勉強会	7（平均）
造形・製作	佐伯	4（平均）	グループワーク	上村・佐伯・杉山・田中・善本	7（平均）

Ⅱ 平成28年度セミナー実態調査の概要

幼児教育コースの学生を中心とした後期セミナー終了後の平成29年2月初旬、初等教育学科4年生を対象とした調査用紙（A4サイズ1枚）によるアンケートを実施した。学生自身の取組について5段階尺度法（5あてはまる、4ややあてはまる、3どちらともいえない、2あまりあてはまらない、1あてはまらない）で自己評価させ、チャレンジセミナーに対する要望、感想なども記述させた。初等教育学科4年生130人中103人（児童教育コース61人、幼児教育コース42人）の回答（回収率79.2%）があった。使用した調査用紙は、資料（P.26）に示す通りである。

Ⅲ 平成28年度セミナー実態調査の結果と考察

平成29年2月中旬から3月にかけて、回収した調査用紙の集計と分析を試みた。結果と考察は以下の通りである³⁾。

1. セミナーへの参加度

図1は学生のセミナー参加度を表したものである。セミナー全般には4、5と回答した学生が7割を超えており、積極的・主体的に参加していることがわかる。また、実施形態からの参加度を見ると、演習形式（集団討論、模擬授業・模擬保育、面接など）は、4、5の回答が7割を超えており、積極的に参加しているといえる。これは、通常授業で行われているものとセミナーで独自に行われるものとの内容の違いと思われる。

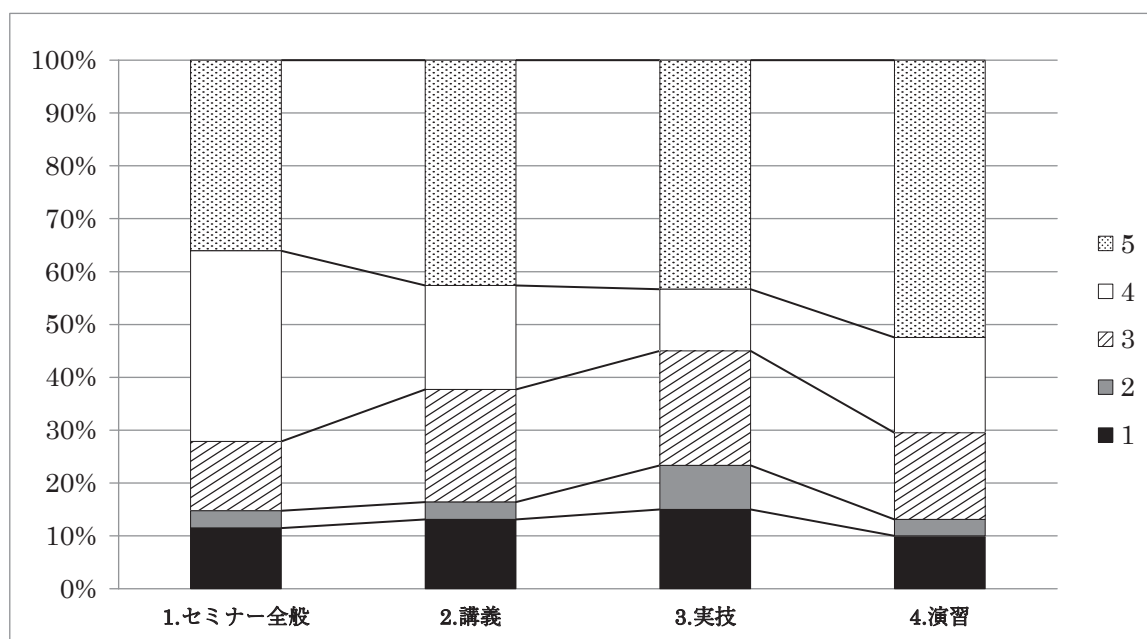


図1 【セミナーに積極的に参加したか（全体）】

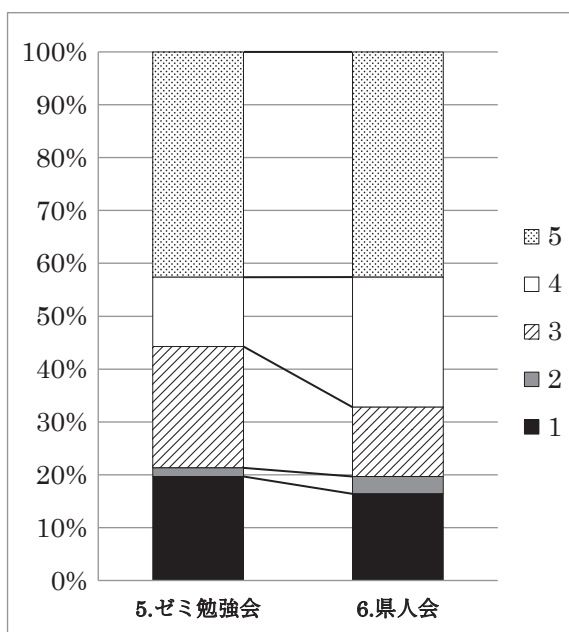


図2 【勉強会に参加したか（児教）】

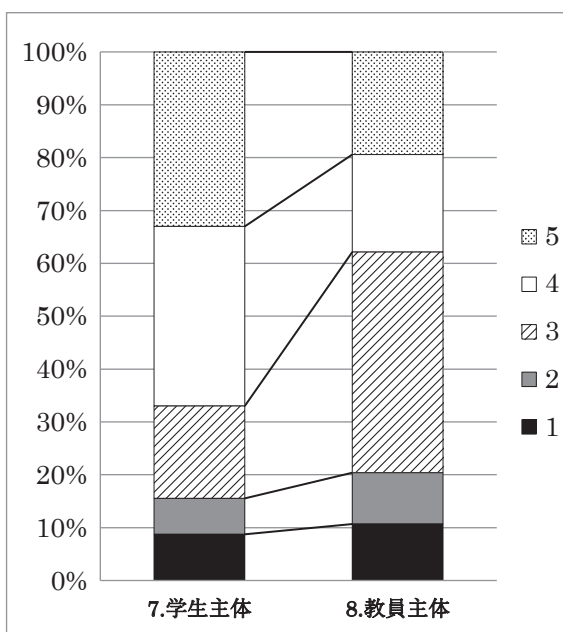


図3 【学生主体か教員主体か（全体）】

図2は勉強会への参加度を問うたものである。ゼミの勉強会、県人会の勉強会ともに4、5の回答が5割を越えており、積極的に参加していることがわかる（児教のみの回答）。ゼミ毎に勉強会の持ち方が違うためか、県人会の方がより高く、4、5の回答が7割近くになっている。

図3は実施主体を聞いたものである。「7. 学生自ら企画・運営したので積極的に参加した。」「8. 教員が企画・運営した方が積極的に参加する。」については、学生主体の方は4、5の回答が6割を超えており、教員主体の方は4、5の回答が4割に届かず、3の回答が4割を超えている。学生主体である方が、より学びの意欲を喚起するのだろう。この項目に限らないが、一般就職の学生はセミナーに参加しておらず、1と回答しているケースが多かった。

2. セミナーでの力量形成についての自覚

次に、セミナーに参加することによって力がついたかどうか自己評価をさせたものが図4である。セミナー全般では、4、5と回答した学生が7割を超えており、力がつuitたと多くの学生が自覚していることがわかる。ここでも、講義や実技は4、5の回答が5割を超えているが、演習は8割近くになっており、より力がつuitたことを実感しやすいといえる。とりわけ模擬授業や集団討論などは、セミナーのその場で、目に見える形で成果が現われるため、力量の形成が可視化されると言えるのであろう⁴⁾。

図5は勉強会での学びの成果を問うたものである。両方式（ゼミ，県人会）5割以上のものが成果を評価している。良い学びがあったものと考えられる。

図6は実施主体の違いで力が付くかどうか聞いたものである。学生主体では6割，教員主体では4割が成果を評価している。これは，自ら企画・運営をすることで意欲的に関わり，成果を上げることに繋がっていったのではないだろうか。学修とは本来自らが求めて学ぶことである。3年間の学びの後，採用試験に向かうという目的意識をもって取り組むことで，学修する本来の意味が実感できたといえれば望ましいことである。

図7は「17. 個人でやるより集団でやった方が頑張ることが出来た。」「18. 教え合い，学び合いがよく見られた。」「19. 友人とやることで安心感があった。」「20. 友人とやることで意欲がわいた。」についての結果を表している。どの項目も4、5の回答が7割を超えており，集団による取組，学生の協同性（協働性）によって安心感や意欲の向上などのプラスの効果をもたらしたといえる。

セミナーで身に付いた力は，目前の教員採用試験だけでなく，将来教職に就いてからも役立つものであろう。現在の学校や幼稚園・保育所は多様な問題を抱えており，教員並びに保育士は組織として対応することが不可欠な状況である。セミナーでの取組，集団での学びを通して，「協業」である教員並びに保育士の構えと技能を身に付けることができるのではないだろうか⁵⁾。

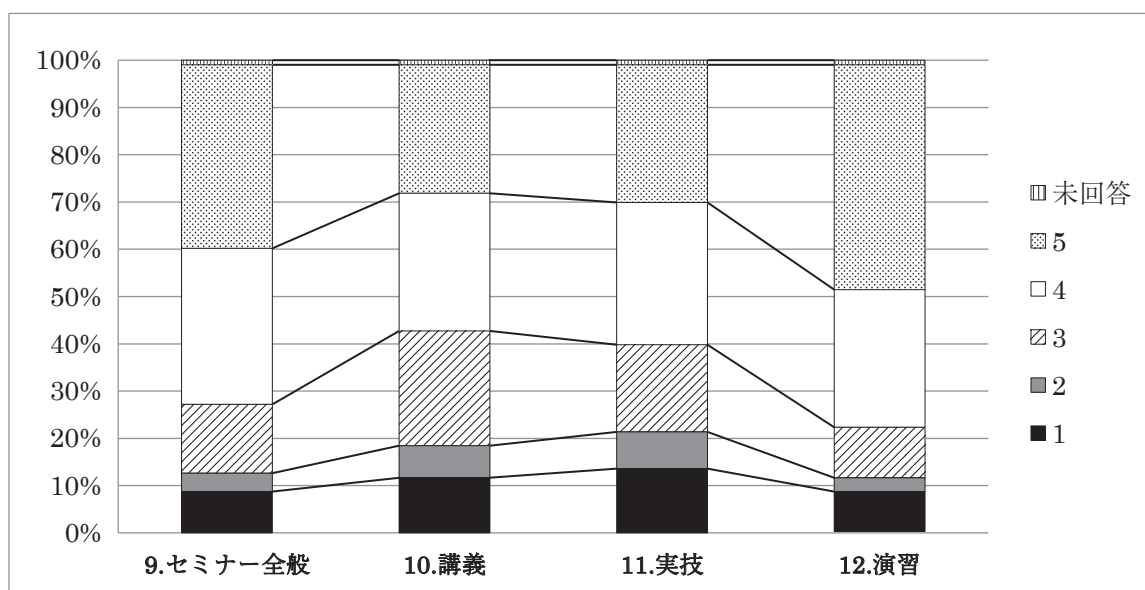


図4 【セミナーに参加して力がついたか（全体）】

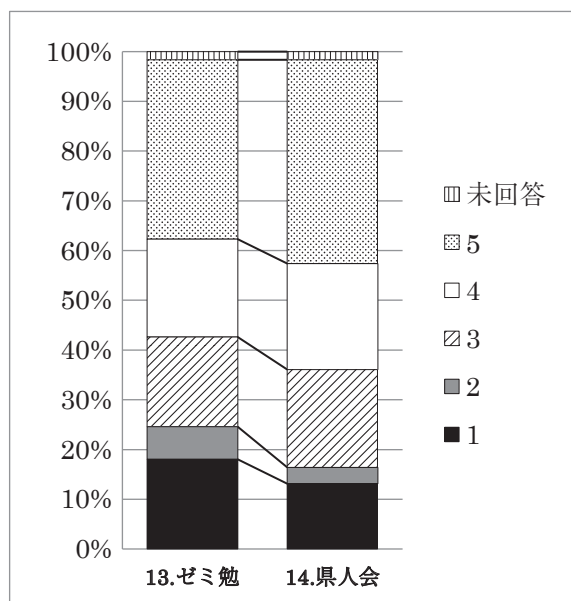


図5 【勉強会で力がついたか（児教）】

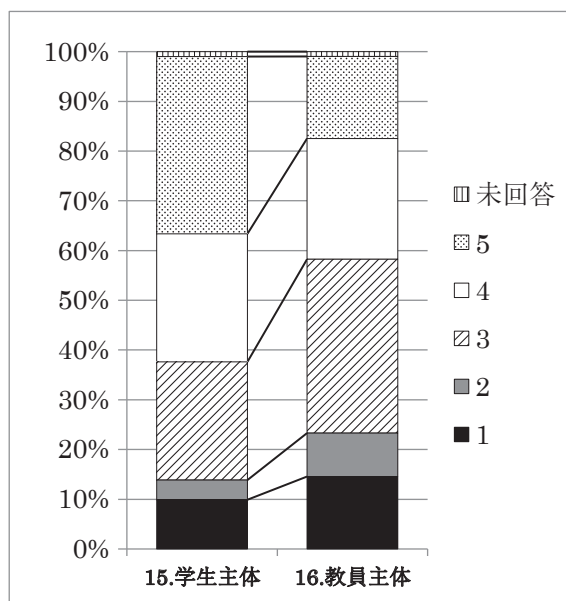


図6 【学生主体か教員主体か（全体）】

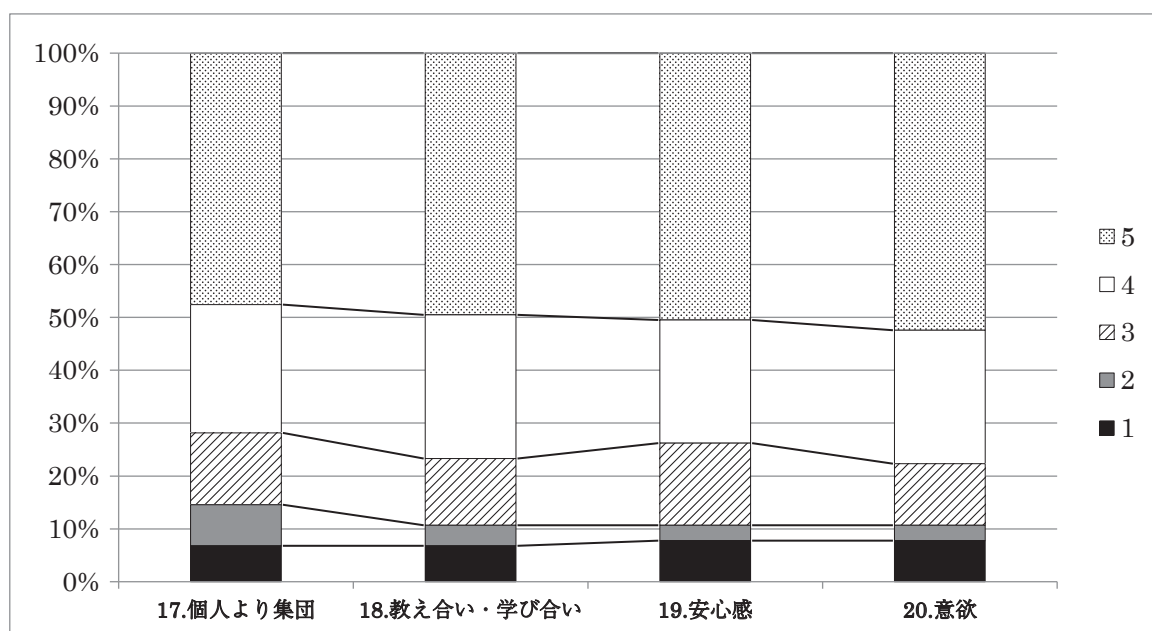


図7 【集団としての活動の評価（全体）】

3. セミナーへの要望

図8はセミナーへの要望を3つの項目（「教員の支援の時間を増やす。」「講座の種類を増やす。」「講座の内容を改善・充実する。」）から選択させたものである。「講座の内容を改善・充実する」が5割を超えており、「教員の支援の時間を増やす。」と「講座の内容を改善・充実する。」が20数%ではほぼ同率であった。来年度に向けて講義内容の改善・充実を学生たち自ら考えていくことも大切なのではないだろうか。そのために、講義内容と実際の教採の試験問題との関係をよく分析してみる必要がある。

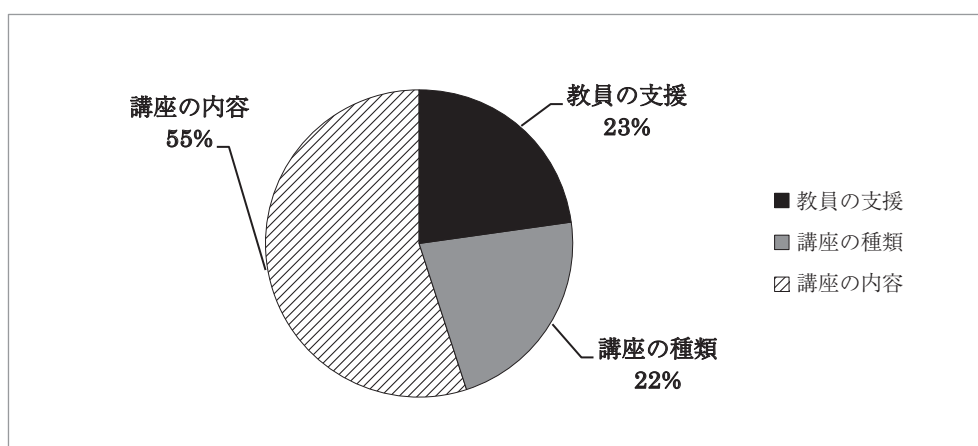


図8【セミナーへの要望（全体）】

4. セミナーの成果と課題

図9はセミナーで得たものを自由記述で書かせ、その後同じ内容のものを分類してまとめたものである。それぞれの結果は、協同性が最も多く（43%）、次いで学びの姿勢・意欲・方向性（32%）、知識・スキル（19%）、運営力（6%）であった。自由記述には、学びの習慣、知識・スキルが身に付いたことを実感しただけでなく、仲間との協同によって意欲が高まり、前進することができたという回答が多かった。この点が本セミナーの一番の効果であると考えられる。今後も大切にしていきたい。

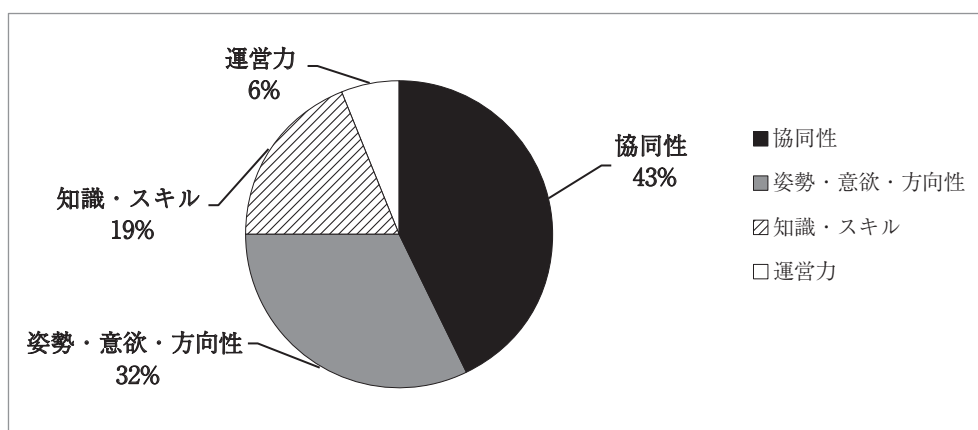


図9【セミナーで得たもの（全体）】

その他として、全体としての意見・感想・要望・改善策などについて自由記述させた結果を分類し、表にすると表5のようになった。課題としては、セミナー委員の負担が大きかったのではないかとという委員以外の学生からの意見が見られたことである。教員によるセミナー委員からの聞き取りでは、それ程負担を感じていない学生もいたため、運営側と参加側の意識の違いにもよるのかもしれない。少数ではあったが、今年はみんなでやろうという気持ちが全体的になかったのではないかとという回答もあった。

表5【自由記述の結果一覧】

	個別対応希望	委員の負担過多	意欲向上	盛り上り欠如	取組遅い	担当・相談教員・不明	昨年情報希望	教員との連携難	教員の協力姿勢
児教	1	1	1	1					1
幼教		2			1	3	1	1	1

幼教セミナーについては、取組のスタートが例年より遅かったため、4年次6月に履修する教育実習Ⅲ（幼稚園）などで忙しくなる前に、早めに組織を動かして取組を開始する方がいいのではないかという改善策の提案があった。

セミナー委員と教員との関係についても良好であり、感謝しているという回答が多かった。その反面、積極的に協力して欲しいという意見、責任者がわかりにくいという回答も少数見られた。

学生主体であるということに意味があるという回答もあり、教員は学生の要望によってサポートするという従来からの関与の仕方が大切であると再確認することができた。今後もこの体制、学生主体による運営は大切にしていきたい。

その反面、小学校教員採用試験に関して言えば、今後は少しずつ採用数も減っていく状況も控えているので、セミナーの内容を改善・充実させていくとともに、1～3年次の前期・後期に1回ずつ実施する教採セミナー（ガイダンス）を継続すること、平成29年度から配属された教職センター常駐教員との連携などによって、教員による支援体制もさらに充実させていかなければならないだろう。教職センターと学科との連携も、より密にしていかなければならない。

幼稚園教諭・保育士採用試験に関しては、保育士不足が社会問題になっていることもあり、全体的には求人数増加の傾向にある。しかし、公立の園に関しては、ここ数年の実績では10～20倍程度の倍率になる自治体もある。幼稚園教諭・保育士採用試験に関しては、自治体によって試験実施時期や試験内容が違っており、実施のしかたに工夫を要する。平成29年度から幼稚園教諭・保育士対象の教採セミナー（ガイダンス）の実施を開始した。1年生は小・中学校教員対象との共催とし、2年生からは幼稚園教諭・保育士試験に特化した内容として別に設け、授業で学ぶことに加え、見通しをもって2年次から取り組むことを盛り込んだ。平成29年度前期末実施時のアンケート結果から、現実を知って不安を抱く点もあったが、取り組んでみようという回答も複数あった。段階的に実習や授業が配置されている幼児教育コースの特性を活かし、児童教育コースの実践に学びながら継続的な取組を行っていききたい。

他には、「講座の内容を改善・充実する」ことを望んでいる学生が5割を超えていた。どのように改善・充実したらいいのかまでは具体的に聞いてはいないが、地域別だとより充実する気がするという回答した学生もいた。しかし、学生の主体性・協同性による学びを大切にするという点では、教師主導になってセミナーが予備校的にならないように留意したい。採用試験対策が単独で実施されるのではなく、教師教育における教職課程教育の関連・発展・応用としてのセミナー実施である。セミナーは、大学教育・教職課程教育の補充・深化・統合を目指す役割も果たしている。それぞれが有機的に相互に繋がり、総合的に展開されてはじめて意味あるセミナーになると考える。学生の要望によってサポートするという教員による関与の仕方を大切にしつつ、初等教育学科の教育方針を継承・発展させていかなければならない。

5. 学科人材育成目標との関連

本学科の人材育成目標は「教育に関する専門的な知識や技能を修得し、主体性と協同性を持った逞しい実践力のある人材を育成する」である。この中からキーワードとなる言葉を拾うと「専門的な知識や技能の修得」、「主体性と協同性」、「逞しい実践力」の3つが挙げられる。この3つの視点から今回の結果を分析してみる。

1. 専門的な知識や技能の修得・・・図4に表されているように、概ね7割前後の学生が力を付けたと評価している。特に、模擬授業や集団討論などを含む演習形式の学習では8割の学生が力が付いたことを自覚している。日頃の学びよりもより現場に近づいた実践が技能の側面に大きな力になったと考えられる。また、知識に関わる講義形式の学習においても6割近くの学生が力が付いたと評価している。教育に関わる専門的な知識が再確認された結果であると考えられる。
2. 主体性と協同性・・・主体性については、いかに積極的に参加したかにおいて評価される。図1を

みると、6～7割の学生が積極的に参加したことが分かる。強制されるプログラムではないが、多くの学生が採用試験に向けての気持ちを高め参加している様子が伺える。また、セミナーとは別の組織として活動するゼミや県人会の勉強会は特に強い意志がなければ組織化されないものである。先輩の申し送りなどもあると考えられるが、目標に向かう主体的な活動として大きく評価できるものである。図3では学生主体での活動の方が教員主体で進めるものより、より積極的に参加する実態が明らかになった。この辺りからも本学学生の主体性を確認することができる。協同性については、図7の結果から考察できる。7～8割の学生が集団で協同して目標に向かうことに肯定的な考えを持っている。一人では挫けそうになる時でも仲間の支えにより何とか頑張ることができたようである。共に頑張ることによって個の力が大きくなり困難な目標にも挑戦できることを学んでいくようである⁶⁾。

3. 逞しい実践力…この力はセミナー、ゼミ勉強会、県人会の勉強会等、幾つかの組織を形成しながら、それぞれの活動の中で企画・運営などを行い、メンバーと協力しながら活動することによって身に付いていると考えられる。仲間とは言いながら様々な考えを持った人が集まり同じ目的に向かって進むことは容易いことではない。それらを上手くまとめ同じ方向に向かって頑張ることは大変なことである。それでもそれらの経験を積みながら逞しく、実践的な力を付けていくものと考えられる。

おわりに

平成28年度のセミナーの成果と課題は、以上の通りである。セミナーが、初等教育学科の「教育に関する専門的な知識や技能を修得し、主体性と協同性を持った逞しい実践力のある人材を育成する」という人材育成目標の達成に寄与することを改めて確認することができた。

課題としては、今回実施したアンケート調査が、初等教育学科4年生（33期生）が卒業する間際の平成29年2月上旬に実施したことである。次年度は、学生が余裕を持って回答できるようにアンケートの実施時期を早めるよう改善したい。また、今回の調査にはアンケート用紙を用いたが、学生がより回答しやすいようにウェブ上でのアンケート実施も今後検討していきたい。調査方法を改善しつつ、継続して進路に関する取組の調査を行い、学生の進路保障に少しでも反映させていきたいと考える。

註、引用・参考文献

- 1) 今崎浩・佐伯育郎「公立小・中学校教員採用試験に向けた取組の実際」広島文教女子大学、教職センター年報・第2号、平成26年、pp.63-70。佐伯育郎「公立小・中学校教員採用試験に向けた取組の実際」広島文教女子大学、教職センター年報・第3号、平成27年、pp.99-106。佐伯育郎「公立小・中学校教員採用試験等に向けた取組の実際」広島文教女子大学、教職センター年報・第4号、平成28年、pp.133-141。佐伯育郎「公立小・中学校教員採用試験等に向けた取組の実際」広島文教女子大学、教職センター年報・第5号、平成29年、pp.99-105。ただし、集団討論セミナーについては、以下の論文において詳細な分析・考察を行った。佐伯育郎・徳本達夫「教師教育における集団討論の意義と実践（Ⅰ）～本学における取組の実際～」広島文教女子大学、教職センター年報・第3号、pp.17-34、平成27年。徳本達夫・佐伯育郎「教師教育における集団討論の意義と実践（Ⅱ）」広島文教女子大学、教職センター年報・第3号、平成27年、pp.35-50。
- 2) 広島文教女子大学初等教育学科 編集『初等教育学入門』株式会社レタープレス、平成22年、pp.165-167。村上典章は、同書の中で「第5章 学びを支える仲間づくり(3) ねうちづくりに重点を置いた教採自主ゼミ(勉強会)」と題して、初等教育学科での教員採用試験に向けた取組が始まった経緯、特に学生主体の勉強会の意義などについて詳しく述べている。
- 3) 平成28年度の採用試験などの進路に関する取組（チャレンジセミナー）の調査結果については、平成29年3月15日の初等教育学科の学科会において報告を行った。本論文は、その報告書に加筆・修正を行ったものである。
- 4) 上條晴夫編集責任『教師教育』さくら社、平成27年、pp.65-66。同書において模擬授業を使ったトレーニング

グについて言及している野口芳宏は、「例えば、『形成』とは次のようなことが客観的に認められることである。ア 知らなかったこと、できなかったことを知り、できるようになった事実。(入手, 獲得) イ 誤りに気づき, 改めた事実。(修正, 訂正) ウ 浅く断片的な理解, 習得が, 深められ, 構造化された事実。(深化, 統合) エ 拙く, 不十分だったものが, 上手に, 美しく, 十分になった事実。(上達, 進歩) オ できたりできなかったりしていたことが安定し, 確かになった事実。(反復, 定着) カ 学んだこと, 身につけたことが活用, 応用できた事実。(活用, 応用) 模擬授業によって, これらが多く認められれば多く認められるほど, その授業技術は高く, 確かなものだったと言える。」と述べている。本学のセミナーにおいても, 野口が述べているような形成の様子が散見される。

- 5) 今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波書店, 平成24年, pp.35-50。今津は, 教職を目指す学生が「個業」から「協業」へと教職イメージを転換する必要があると述べている。本学におけるセミナーの取組が, 教師としての資質・能力を高めるだけでなく, 「協業」への準備になると筆者らは考えている。
- 6) 苫野一徳『教育の力』講談社, 平成26年, p.108。苫野は, 「ちなみに, よく『競争』が学力の向上策として取り沙汰されますが, 実は教育学や心理学等のさまざまな調査研究において, その通念は多くの場合, かなり間違っていることが明らかにされています (コーン1994など参照)。むしろ, 学力の向上だけでなく, たとえば芸術的創造や会社の営業といった場面においてさえ, 『競争』より『協力』『協同』の方が, 高い生産性を生むという調査結果が多く報告されているのです。個人間の競争がインセンティブになるのは, 成績上位のそのまたごく一部, あるいはきわめて強い“ハングリー精神”を持った, 限られた範囲の子どもたちだけにすぎません。それ以外の多くの子どもたちは, たとえば競争に負け続けることで, 勉強への意欲を失うこともしばしばです。成績上位の子どもたちでさえ, 絶えず競争のプレッシャーにさらされていては, その本領をいつか発揮できなくなってしまうかもしれません。その意味でも, すべての子どもたちの質の高い学びを保障するためには, 総じて見れば, 競争より協同の方がはるかに効果的であるということが出来るのです。」と述べている。協同 (共同・協働) による教育的効果の高さは, セミナーをはじめとする本学の取組にも顕著である。

【資料】

採用試験などの進路に関する取組（チャレンジセミナー）の実態調査【4年生対象】

初等教育学科

今年度も、学生のみなさんを中心に、教員のサポートを受けながら採用試験などの進路に関する取組を行ってきました。本調査は、学生のみなさんによる主体的な学び（勉強会・県人会など）を自己評価するとともに、教員による支援についても振り返り、今後のよりよいあり方を考える参考資料にします。ご協力のほどよろしくお願いします。

1 コースを教えてください。

○ 児童教育コース（全問回答） ○ 幼児教育コース（No.5,6,13,14 は答えなくてよい）

2 以下の取組について5～1で評価して下さい（5はあてはまる、4はややあてはまる、3どちらともいえない、2あまりあてはまらない、1あてはまらない）。なお、取組については幼・保・小などの区別はありません。

項目		自身の取組に対する自己評価
1. チャレンジセミナー全般に積極的に参加した。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
2. 講義形式（学習指導要領など）の講座に積極的に参加した。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
3. 実技形式（音楽、図工、体育）の講座に積極的に参加した。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
4. 演習形式（集団討論、模擬授業、面接）の講座に積極的に参加した。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
5. ゼミの勉強会に積極的に参加した。	児	○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
6. 県人会の勉強会に積極的に参加した。	児	○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
7. 学生自ら企画・運営したので積極的に参加した。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
8. 教員が企画・運営した方が積極的に参加する。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
9. チャレンジセミナー全般に参加して力がついた。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
10. 講義形式（学習指導要領など）の講座に参加して力がついた。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
11. 実技形式（音楽、図工、体育）の講座に参加して力がついた。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
12. 演習形式（集団討論、模擬授業、面接）の講座に参加して力がついた。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
13. ゼミの勉強会に参加して力がついた。	児	○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
14. 県人会の勉強会に参加して力がついた。	児	○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
15. 学生自ら企画・運営したので力がついた		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
16. 教員が企画・運営した方が力がついた		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
17. 個人でやるより集団でやった方が頑張ることが出来た。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
18. 教え合い、学び合いがよく見られた。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
19. 友人とやることで安心感があった。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1
20. 友人とやることで意欲がわいた。		○5 ・ ○4 ・ ○3 ・ ○2 ・ ○1

3 本年度実施してみて、次年度に向けて検討する必要があると思われる内容について、以下から選択してください。複数回答も可能です。

○ 教員の支援の時間を増やす。 ○ 講座の種類を増やす。 ○ 講座の内容を改善・充実する。

4 (1)このチャレンジセミナーに取り組んで得たもの。(必ず記入) (2) 自主活動組織のチャレンジセミナー委員会と教員との関係について。(3)その他、全体としての意見・感想・要望・改善策などについて、自由にお書きください。

以上でアンケートは終わりです。協力していただき、感謝いたします。